

コスモス 4月号

第74巻 第4号

◆宮柵二カレンダー(85) 四月の歌

燕麦の青むを見ればそこはかと流転るてんのわれにも春は来むかふ
歌集『若き悲しみ』

昭和8年4月2日、二十歳の歌。前年に堀之内の実家を去り、東京の新聞販売店に住み込んだが、月末には転職する。K・Iとの恋に影が差し、焦燥の中にあつた。そのような状態を〈流転〉と表現する。一方、この月には北原白秋を初めて訪ね、翌々年には秘書となるのだが、将来への光が仄かに見えていると思われる。それを、主に馬の飼料として栽培されてきた燕麦の成長に託して詠む。やや大仰な四句と、将来を期する結句に、若き宮柵二の苦悩と希望を読み取る。

(中津川勲坐)